

## イランをめぐる一考察

東京大学大学院総合文化研究科

修士課程1年 吉田莉々

### 1. イランで国際関係を問う

飛行機の着陸を合図に女性たちが忙しなくスカーフを巻き始めると、いよいよイランに着いた実感が湧いてきた。四方で飛び交うペルシア語をどれくらい聞き取れるか自分を試しつつ、他の日本人学生とは異なる色のパスポートを握りしめて入国審査に向かった。「現金がない」といういかにもイランらしい理由で両替を断られると、一行は仕方なく空港を後にした。ツンと鼻をつく匂いと雑然とした街並みに懐かしさを感じながらヴァンに揺られ、ホテルに着いたのは23時を過ぎた頃だった。前回の渡航から1年も経たずして再びイランを訪れることになるとはつゆも思っていなかった。

私はイラン人の父を持つハーフであり、小学校時代をテヘランで過ごした。中学校から現在まで日本で暮らしていたが、2024年冬、大学卒業を前に父に会いにイランを訪れることにした。そこで気づいたのは、11年という期間はイラン社会を大きく変容させるに足る年数だったということだ。欧米各国の厳しい経済制裁による通貨の暴落<sup>1</sup>、女性のヒジャブ着用をめぐる大規模抗議デモ<sup>2</sup>など、ニュースで見えていた出来事は確とイランの日常生活に波及していた。

イラン社会の変化を目の当たりにした私は、イランを一介の故郷としてぼんやりと認識するだけでは国際関係を専攻する学生として勿体無い、もっと言えば無責任だと痛感した。そう考えていた折に知った本プログラムは、イラン外務省付属の国際関係学院（School of International Relations, 以下SIR）というトップレベルの環境を受け入れ先とし、イランと国際問題の関わりを熟考する場が数多く与えられていた。私は大変幸運なことに参加する機会をいただき、新たな視座からイランを捉えるきっかけとなっただけでなく、日本・SIRの学生双方と強い信頼関係を築くことができたと考えている。本報告書は、筆者の疑問や問題意識を出発点に、プログラム期間中の視察・訪問やSIRの学生との交流を通して考察したことをまとめた備忘録である。紙面の制約上、イスファハーンやカーシャーンで体験したイランの美しい伝統や、イラン人の抜きん出たホスピタリティ、イランの豊かな食文化等について字数を割くことが叶わないことを予めお断りしておく。なお、本所感 は筆者個人のものであり、笹川平和財団の見解を示すものではない。



アリガブ宮殿から壮大なイマーム広場を見渡す

<sup>1</sup> 米国第1次トランプ政権が2018年5月にイラン核合意（JCPOA）の離脱を表明し「最大限の圧力」のもと経済制裁の強化を図ってから、イラン通貨リヤルは米ドルに対して下落の一途を辿っている。2018年4月に1ドル=50,000リヤル強だったレートは同年9月に1ドル=150,000リヤルに目減りした。2025年2月には第2次トランプ政権が大統領令で「最大限の圧力」を復活させると、1ドル=900,000リヤルまで下落し、経済に打撃を与えている。

(<https://alanchand.com/en/currencies-price/archive/usd-hav> より)

<sup>2</sup> 2022年9月にヒジャブの付け方に理由にクルド人女性のマフサ・アミニさんがイランの風紀警察に拘束され、数日後に死亡する事件が起きた。彼女の死は大規模な抗議運動に発展し「女性、命、自由（Zan, Zendegei, Azadi）」というスローガンのもと女性を含む多くのイラン人が声を上げた。政府当局はデモを厳しく弾圧し、反政府デモは鎮圧されたが、その後もイランにはヒジャブを着用しない女性の姿が見られるようになった。

## 2. イランのアイデンティティ—複雑な問題への眼差しとして

---

テヘラン滞在2日目、SIRの学生らとともに徒歩で向かった先は国立イスラム革命・聖防衛博物館であった。本博物館では、イラン・イラク戦争におけるイランの「聖なる防衛」の経過と、その過程で生じた甚大な被害が展示されていた。爆撃体験ブースをはじめ臨場感溢れる展示の数々には、イラクに一方向的に攻め入れられ、欧米諸国に苦しめられたイランの痛ましい物語が綴られていた。印象に残っているのは、案内してくれたSIRの学生が国のために命を捧げた殉教者<sup>3</sup>に度々思いを馳せていたことである。趣向を凝らした博物館の世界観に圧倒されつつ、そこで触れた鮮烈なイスラム革命思想を消化できずにいた。

その夜、観光を終えレストランで食事を待っていた際に、学生の間でイランの徴兵制が話題に上がった。その時、SIRの学生のひとりがキッパリと「徴兵制は自分自身を守れるようになる上で必要不可欠だと思う...でも2年は長すぎる。2ヶ月で十分だよ」と言い放った。先の博物館での振る舞いから彼が敬虔なイスラム教徒であることが伺えただけに、現体制の政策批判とも取れるこの発言は私にとって思いがけないものであった。シーア派の教えを信仰することと、イラン革命体制を支持することはどの程度一致するものなのか。イランにおける政治と宗教の関係についてSIRの学生と意見を交わし、自分なりに考察することが一つの目標となった。

翌日、テヘラン北部にあるタジュリッシュ・バザールで買い物をしながら、同伴してくれていたSIRの学生に先の疑問を投げかけてみた。彼はそこで、国営イラン通信のCEOであるJaberi Ansari氏<sup>4</sup>の議論を援用しながら実に興味深い回答をくれた。彼によると、イランのアイデンティティは4つの歴史的・思想的要素に分類できる。①イスラム以前の歴史的アイデンティティ、②イスラム教流入後に生まれたイスラムアイデンティティ、③サファヴィー朝後に発展したシーア派アイデンティティ、そして④西洋との関わりの中で形成された近代的アイデンティティである。現代のイラン政治において、④の西欧的な現代性を念頭に、これら4つのアイデンティティのバランスをどのように取るかが主要な問題であり、イランの外交官もその均衡を常に模索しながら職務にあたる必要があるのだと彼は語ってくれた。

イラン革命体制は基本的に宗教的信条を政策に厳格に反映している。こうした政府の姿勢は、2022年の大規模抗議運動に見られたように国内外から反発を受けてきた。しかし、イランのアイデンティティに関する分析を聞いてから、このような論争を「政府＝イスラム vs 反政府＝反イスラム」という構図に落とし込むのは短絡的であると気づいた。イランはどの時代においても、多様な価値観をいかに包摂し、複雑なアイデンティティの均衡をどのように取るかという課題に直面してきた。私が話したSIRの学生たちはそのことをよく理解しており、国内外における政治問題を論じる際、イランが抱える様々な葛藤の裏にある複雑な背景を丁寧に捉えるよう努めていると感じた。

---

<sup>3</sup> 聖典クルアーンによれば、ジハード（聖戦）で命を落とした者は殉教者（シャヒード）とされ、天国への道が約束されている。イラン・イスラム共和国放送が運営しているニュースサイト「ParsToday」の日本語版サイトでは、英雄たる殉教者を語り継ぐことは「覇権主義勢力に対する抵抗や国家の自立を確たるものにする」と論じている。

(<https://parstoday.ir/ja/news/iran-i125230-なぜ殉教者を語り継ぐことが重要なのか>より)

<sup>4</sup> Hossein Jaberi Ansari氏は30年以上外交官としてのキャリアを積んでおり、中東情勢に精通している人物である。

(<https://nournews.ir/en/news/190466/Jaberi-Ansari-became-the-CEO-of-IRNA>より)

ここに記載した内容は、“کنش دیپلماتیک بر اساس عناصر هویتی”（『イランのアイデンティティに基づく対外政策』）というインタビュー記事における議論を元に、SIRの学生が説明してくれたものである。

イランにおける宗教と政治の関係性を問い、アイデンティティの話を經由して辿り着いたのは、どんな事象や命題もその複雑性を理解する営みこそが重要だということである。元国連大使の Saajadpour 氏が講義の際に述べていた、「単純化 (simplification) と還元主義 (reductionism) は避けるべきだ」という訓戒がより重みを持って心に刻まれた。

### 3. イランの外交官たちが示唆したこと

---

外務省付属の大学院が旅程を組んでくださった関係で、プログラム期間中はイランの外交官と接する機会が多くあった。彼らは機知に富んでいて親しみやすい雰囲気を感じていたが、イランの外交的立場を論じる際は抜け目がなく、腹の内を見せない手強さも感じた。ここでは、特に印象に残った外交官の発言を起点に、自分なりの視点でイランの外交的立場とその展望を論じたい。

#### ① 地域大国としてイランが果たせる役割

テヘラン滞在3日目の夜、SIR主催のウェルカムディナーにて学長の Dehshiri 氏とお話する機会があった。そこで彼は、イランが Hamas や Taliban と対話するネットワークを持っており、直近でも様々な外交努力を重ねていると教えてくれた。Hamas や Hizbollah など、西側諸国からテロリストと指定されるような組織と強い結びつきを持っていることから、イランは中東の軍事的脅威として警戒されてきた<sup>5</sup>。一方で、イランがそうした「テロ組織」と対話し、政治問題の平和的解決を働き掛けられる立場にあることも一つの見方である。イランの中東における影響力が、更なる対立の呼び水ではなく、その地域の和平の推進力となることを期待したい。

#### ② 西側諸国による経済制裁への対応

イラン国内の不協和音は国民の生活の苦しさに起因する部分も大きく、その背景にある経済制裁は常に争点となってきた。イラン外務省のアジア・太平洋局長の Mohammadi 氏に表敬訪問をした際、「イラン外務省は制裁解除に向けてあらゆる努力を重ねており、イランの人々のために最善を尽くしていることを誇りに思っている」と語った。しかし、制裁問題は必ずしも外務省の立場だけで対処できるものではなく、政府内の多様なアクターが絡むきわどいイシューになっている。第2次トランプ政権を前に、イランの経済制裁をめぐる問題がどう展開するか今後も注目していきたい。

### 4. 結語

---

イランに特別な思い出がある国際関係の学徒として本プログラムで得た学びは今後の人生において重要な参照点になる確信している。笹川平和財団や SIR の皆様をはじめ、この素晴らしい研修の実現のために尽力してくださった全ての方々に厚く御礼申し上げたい。また、11日間を共に過ごした日本人学生やテヘランで帯同してくれた SIR の学生は私の感性や知的好奇心を大いに刺激してくれた。ここで感謝の気持ちを述べるとともに、この絆を未来に繋げていけたら何より嬉しい。今回のプログラムを通して、立場が決定的に異なる者同士でも、お互いに対して敬意を払いながら建設的な対話を重ねれば、差異を乗り越えて共通価値を見出すことができると感じた。今回の経験を豊かな想像力に変え、世界平和に寄与する人材になりたいと強く願って本報告書を締め括る。

---

<sup>5</sup> イランが主導する武装組織ネットワークは「抵抗の枢軸」と呼ばれ、アメリカなどが強く警戒している。  
([https://www3.nhk.or.jp/news/special/international\\_news\\_navi/articles/feature/2023/11/20/35987.html](https://www3.nhk.or.jp/news/special/international_news_navi/articles/feature/2023/11/20/35987.html) より)